

「教養知」についての人間論的考察

—ホモ・サピエンスとホモ・ルーデンス—

和光大学人間関係学部 服部 百合子

はじめに

1991年の大学設置基準改正を契機に、全国国公立大学では大学改革が展開された。その重要な柱である教養教育では、3分野／保健体育／外国語という区分が撤廃され、各大学の自己責任と自由裁量に委ねられることになった。しかしながら、多くの大学においては、厳しい生存競争を目前に、改革の重大な関心を大学経営の問題に注がざるを得ず、その中では学部再編の問題が緊急課題となり、教養教育の改革が十分な論議を経て行なわれたとは言いがたい。中学卒業者のほぼ半数が大学に進学する「ポスト大衆化段階」の大学において、タテマエ論に傾きがちな旧来の「教養」の理念の限界の自覚と、根本的な捉え直しが必要になってきていると思われる。

こうした中、本年5月中曾根弘文文部大臣から中教審に対し「新しい時代における教養教育のあり方について」の諮問がなされ、従来、高等教育の問題とされてきた教養教育の問題が「初等中等教育段階から高等教育段階まで」の問題として課題化された。その背景として、1980年代から徐々に顕著になってきた、いじめ、校内暴力、家庭内暴力、学級崩壊などの諸問題、またオウム事件やカルトがらみの犯罪など、アノミー的な現象の進行をあげないわけにはいかない。「教養教育の理念・目的」への問いは、現代社会を導いてきた「知」のありようそのものにまで遡るべき性質のものではなかろうか。

昨年度、本学会の研究発表において、大衆余暇型社会における教養の本質をレジャー・レクリエーションの内に見る観点から、知性と感性の相互媒介的な関係の回復を新たな教養教育の課題として提起した。これに対し、「近代知性の危機の中、感性のあり方も危機を免れることはできないのではないか」（立教大学松尾氏）との的確なご指摘をいただいた。大綱化以後の大学教育再編の経過を踏まえて、大学におけるレジャー・レクリエーションのあるべき全体像が論議⁽¹⁾されつつある今、改めて教養知における知性・感性の人間論的基礎構造に関わる考察として再提起し、ご批判をいただくことにした。

1. 感情と「知」

青少年の感情領域における近年の了解困難な諸現象については、学問的な分析や対応がつかないというのが現状であろう。が、学問的分析以前に「ブツン」とか「キレル」などという流行語的表現に、鬱屈したエネルギーが溜め込まれて破裂するにいたるといふ、水力学的なモデルによる感情理論の流布がうかがわれる。こうした通俗的な感情理論の背景には、フロイトの「リビドー」理論や、その影響を受けた感情心理学の「通風理論」や、我慢の有効性を説く行動理論があり、これらの感情理論は、感情を知性のコントロールに服すべき無方向無構造なカオスとして捉えてきた。ここに前提とされているのは、人間の知とその支配の対象たる物的世界との二元的対立の図式である。無明のカオスに閉ざされた感情の世界に、固有の論理や秩序を見ようとするのであれば、その試みは文化や体制を超えて高度産業社会を導いてきた近代合理主義の基盤自体を問うことになるであろう。

そもそも感情という現象は、感覚・知覚の領域、そして欲求の領域まで含めて、一括りに感性と呼ばれ、厳密な分析の対象とされることが少なかった。感性の領域は、とりわけ

理性主義においては、人間の普遍的な本質たる「理性」の能動性に対し、物質的世界に起因する低次の、受動的で有限な側面として捉えられてきた。

近代的な心身二元論の原型を定立したとされるデカルトは、晩年の著作「情念論」において心身合一の事実を「身体の能動に対する魂の受動」として説明した。もともと「情念」(passion)の語源であるギリシャ語“pathos”は「受動」を意味し、この語は西欧の理性主義の系譜において、繰り返し、魂あるいは理性の受動、受苦、病いの状態として位置づけられてきたのである。

カントは感性という語を初めて哲学の用語として定着させ、人間の現実認識への界面たる重要性を確認し、尊敬や美と崇高の感情など、感性の知的・能動的な側面を認めたが、それも感性が理性の法則に統御される限りにおいてであり、理性の支配を排除する欲情(Leidenschaft)や情動(Affekt)は「心の病」にほかならなかった。

他方、近代的理性への反抗として現れたロマン主義は、「冷え切った理性」「啓蒙という名の、血も肉もなき忌むべき骸骨」に対する心情の優位、想像力の高揚などを主張したが、ここでも理性と感性の相対立する二元論的な構造自体は保持された。「知」との内的結合を拒否した感情の優位の主張は、皮肉なことに科学技術で武装した「野蛮」としての「ナチズムの源流」⁽²⁾と批判されるような構造的矛盾を抱えることになったのである。

2. 認知システムとしての感情

20世紀に入ってようやく、感性と知性との二元的断絶を克服する哲学的試みが行なわれる。シェーラーの価値の哲学は感情に志向性を認め、対象に対する価値判断的な意識として捉え、また生の哲学、実存の哲学は笑い(ベルグソン)、不安(キェルケゴール、ハイデッガー)、嘔吐(サルトル)など、これまで哲学の主題から排除されてきた感情や情動、気分、人間の世界の対する態度、人間が世界に見いだす意味を解釈する試みを行なった。しかしカントの理性批判に匹敵するような、感性の領域全般を整理し理論づける試みはほとんど行なわれていない。梅原猛が30年前に着手した「理性と同じほどに厳密な」感情の秩序、感情の論理の解明の試み⁽³⁾は、残念ながら未完に終わっているが、いまでも学ぶところが多い。

これとはまったく別に、近年感情・情動の知的な側面に光を当てる試みが成果を生みつつある。学際科学として目覚ましく発展してきた認知科学は、情報理論と神経生理学また神経化学の発展を新たな武器として、1980年代以降「情動」を認知システムの問題として解明する試みを開始した。

情動状態はしばしば顕著な生理的变化を伴うことから、心理学・生理学による古典的な感情研究は、生物学的な見地からその機能に注目してきた。それらに共通するのは、情動の適応的な機能を重視することである。先駆けとされるダーウィンの進化説、James-Langeの末梢説、Cannon-Bardの中枢説などは、緊急事態における生理的・心理的反応としての情動の適応的な価値を認めた。情動は反省的な「知」ではないとしても、あるレベルの知、「からだの知恵」(キャノン)を含むものと考えられたのである。

認知科学は基本的にこの考え方を受け継いだ。情動は「ある事態やそれに対する働きかけの結果に対してなされる評価的反応」(認知科学ハンドブック)と定義されるように、すでに正負の評価的な認知判断を含む知的な過程として把握されるが、「人体に備わった認知機構」である免疫系が「天敵に対する無意識的なからだの知恵」であるのに対し、「情動と

情動系は（個体保存と種の保存という）二大責務を果たすために特定の生物種に付与された認知機構である」⁽⁴⁾とあるように、認知科学の情動論は基本的に生物学的合目的論に立脚している。情動は、即自的な「からだの知恵」のレベルを超えて、志向的意識のレベルにおける生物学的合目的性の発現として捉えられたのであ。

情動の神経機構についてのこれまでの研究は、情動回路説、自己刺激と快中枢説、カテコールアミン作動神経系仮説など、総じて脳幹部から大脳辺縁系を結ぶ神経回路に注目してきたが、山鳥⁽⁵⁾は「情動にかかわる問題をすべて大脳辺縁系に押しつけて、大脳半球を形ある表象の処理装置としか見なかった時代は去りつつ」あり、「情動を低位の本能行動とのみ結びつけず、ヒトのヒトたる所以であるより高次の行動と結びつけて理解するには、大脳辺縁系もさることながら、大脳そのものの情動に果たす役割が研究されなければならない。」と述べ、この種の研究がすでに新たな展開を見せていることを指摘している。こうした認知科学的アプローチは感情を、①正負の評価的判断を含み、②原因帰属の認知判断が経験内容を規定する認知システムと捉える。正負の評価こそが、他の認知システムとは異なった感情の特色であるが、その正負の判断をなしうるには、その充足や挫折が問題となるような何らかの指向的な作用がなければならない。戸田正直⁽⁶⁾のモデルでは、「アーヂ (urge)」（状況に応じた適応的行動を選択するための心的ソフトウェア）と呼ばれるシステムがその機能を遂行する。ここでは感情とは、環境への適応を指向して状況に働きかけ、その結果についての正負の評価的認知判断を行なうシステムである。

ではこうした環境適応的な認知システムは人間の感情の説明に成功しているのだろうか。それはいわゆるホメオスタティックな動因、欠乏充足的・緊張解除的な動因に関わって生ずる感情をある程度説明するとしても、性的欲求や遊び欲求のように、欠乏とは関わりなく、快楽追求に関わる感情の説明には困難がある。快楽の神経機構については、近年神経化学的方法により、快楽物質（内因性モルフィン様物質）作動の神経機序や脳内経路などが解明されつつあるが、上記の適応モデルが「快楽」を位置づけることは困難である。「快情動がなくても動物はすべて、個として、種として生存することが可能」なのであり、「喜び、満足、快感に積極的意義を見つけることはできない」⁽⁴⁾からである。適応モデルにおける快楽とは、欠乏や危急の事態から脱したときの緊張解除以上のものとして理解することは難しい。まさにカントが言うように「快楽とは苦痛の廃棄のほかならず、なにか消極的なものである。…いかなる快楽にも苦痛は先行しなくてはならない。すなわち、苦痛はいつも最初のものである。」ということになる。

ホイジンガは「人間文化は遊戯の中に、遊戯として、発生し、発展してきた」という有名な命題を提起した。しかし、ホモ・サピエンスの人間観は、認知科学という現代的な解釈においても、遊びという営為を理解できず、人間文化の最上の部分、美、喜び、楽しみ、快楽といった価値を、欠乏や危険の解消というネガティブな解釈に還元することになる。ここに、より根源的な人間規定としてのホモ・ルーデンスの人間観の意義が存在する。

3. ホモ・サピエンスとホモ・ルーデンス

遊びにおいて人間が追求するのは、まぎれもなく快楽である。快楽を追求するからといって現実世界への適応に失敗し破滅に向かうとは限らない。遊びにおいて、人間は現実と虚構との区別を明証的に熟知し、現実と虚構との間を行き来することができる。現実だけに生きる限り苦悩は苦悩に過ぎないが、遊びという虚構の境域は、苦悩をさえ美や崇高と

いう快の経験に変換することができる⁽⁷⁾。環境適応的な認知システムとしての感情が行なう評価は一義的だが、遊びの境域における感情は、充足や安定に退屈し、危険や不安を楽しむ多義的な経験である。こうした多義性は、遊びを知らない「くそ真面目な」現実主義が捨てたものを拾い上げ、絶望から人間を救い出す可能性を潜めるのではなからうか。

デュルケームは、欲求への規制が欠けて、欲求が異常肥大をおこし、慢性的な不満や苛立ちを引き起こす状態を指して「アノミー」と呼び、競争社会における不安と挫折、現代産業社会の物的豊かさと欲求造出作用が引き起こす人間疎外などに関わるものとした。今日の「ムカツキ」「キレル」時代感情とはまさに一つのアノミー状態であろう⁽⁸⁾。

しかし現代産業社会、競争社会の知と技術の機構にそそり立てられ、欲求不満に追い込まれた挫折感情には、何がしか現代社会への正当な認知評価（批判）が含まれてもおかしくない。ただ、こうした直感的な認知評価を普遍的ないし公共的な規範へと媒介する「ことば」の信用価値下落の状況では、無構造無方向な衝動として蓄積し、ときに暴発（キレル）するほかないとも言える。とすれば、感情構造それ自体よりも、ことばが単なる符号となり、知が批判精神を失い、現状適応的な狡知が支配する知の状況こそが問題とされねばならない。

ホモ・サピエンスとは生物学的な人間「ヒト」を指す用語である。アリストテレスの「理性的動物」の観念は、普遍を志向する理性を前提としたが、近代の技術的理性は認知科学に見るように、環境適応という一種の功利的な合理性、目的合理性に矮小化してしまった。適応主義の下した一義的な価値評価を、多義的な光のもとで照明し直し、権力、労働、家族、死など、人間の生の基本的なカテゴリーに対し、多様な価値評価を与えることができるのは、遊びを知る知性である。社会現実に対する根底的な批判とともにポジティブな未来展望を提案する知の可能性は、ホモ・サピエンスよりはホモ・ルーデンスの人間論に求められ、また無方向、無構造となりつつある感情の領域が、それ自身に内在した知的要素を論理へと展開する可能性は、ホモ・ルーデンスの人間観に導かれうるであろう。

大学教育におけるレジャー・レクリエーションの意義も、そうした拮据の中であらざるべきであろう。戦後の教養教育の歴史からいって、レジャー・レクリエーションがスポーツや体育との関係から捉えられがちであるのは仕方ない側面もあるが、重要なのは、人間の知の固有成りなあり方としての「遊び」の理念を大学教育、とりわけ教養教育に位置づけることではなからうか。またそれは「初等中等教育から高等教育にいたるまで」の教養教育を検討する視座に据えられるべき問題でもある。

引用文献

- (1) 「特集：大学教育におけるレジャー・レクリエーション」『レジャー・レクリエーション研究』42号 11～46 2000
- (2) P. ヴィーレック『ロマン派からヒトラーへ—ナチズムの源流—』紀伊國屋書店 1973
- (3) 梅原猛『笑いの構造—感情分析の試み—』角川書店 1972
- (4) 梅本守「生命保全システムとしての情動」『岩波講座認知科学6情動』岩波書店 1994
- (5) 山鳥重「情動の神経心理学」『岩波講座認知科学6情動』岩波書店 1994
- (6) 戸田正直『感情』東京大学出版会 1992
- (7) E. フィンク『遊戯の存在論—幸福のオアシス—』せりか書房 1976
- (8) 宮本光晴「キレル子供かアノミー的自殺か」『発言者』50号 48～53 1998